『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

人間の成就

小野蓮明

本日は皆様方の月例会ということで、初めてご縁を頂戴いたしました。私の学校でも毎月二十八日に、やはり同じように十時半から講堂に集まって例会がございます。今日は、場所は変わりましたが、大変貴重な時間を頂戴しまして、しばらくの間、話をさせていただきたいと思います。

掲げましたテーマは「人間の成就」という大変大きな主題でございます。と申しますのは、長年このことが、自分の頭の中にあるのでございます。

私が大学で学びましたのは、昭和三十年代の初めでございます。従ってもう二十数年、三十

年近く経とうとしているわけでございますが、私はその頃、様々な書物の中で、当時の知識人がこういう言葉を使っているのをしょっ中見たのでございます。「現代という時代の一つの特徴として、人間性喪失ということがある」、こういう言葉でございます。その言葉を見付け出したのは、一度や二度ではございません。人間性の喪失とは、言葉のとおりでございまして、人間でありながら、現代という時代に生きる人々は人間としての最も大切な本性を失っていることでございますから、これは大変な言葉でございます。そういう極めて大胆にして厳しい指摘を、私は当時の方々の言葉の中に見出すことができたのです。人間性喪失という言葉は、もっと端的に申しますと人間不在ということでございます。不在ということは、例えば誰かをお訪ねする場合、連絡をとって時間を決めてお訪ねすれば先方様も待っていてくださるでしょうけれども、そうではなくて、自分の思うままにふいにお訪ねすれば、ご用事で既にお宅においでにならない、そういう場合に不在という言葉を使いますね。すると不在という言葉は、少なくとも本来あるべきところにいないということでございますから、人間不在という言葉も決して聞き捨てならない言葉だと思います。人間でありながら人間として本当のありようをしていないという指摘でございますから、これも随分厳しい言葉でございます。これは、現在日本

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

では約一億二千万の数多くの人々がおりながら、にもかかわらず、本来あるべきところに立っていない、そういう人間のあり方が、現代という時代の人間の特徴的なあり方だということを示している言葉だろうと思うのです。

齢が若いということは、様々な言葉や思想を敏感に受け容れる面もありますけれども、同時に、若いということの一つの特徴として、厳しい批判の眼をもって見るということもあると思います。私は学生時代に、これほど沢山の人間が、人間として生まれ、人間として生きているのに、人間でないはずはない、どうしてそういう言葉が出てくるのだろうかと、私なりに考え、疑ってもみました。しかし、現代という時代を踏まえ、人間性喪失とか人間性不在とかいう言葉に対して、そんなことは断じてない、絶対にないと言い切れる状況にあるかというと、私はやはり、その言葉を最も厳しい現実の指摘として受け取らざるを得ないと思うのです。

私はその時、その言葉は、だからこそ現代という時代に生きる人間は、本当の意味で人間にならなければならないという大きな課題を投げかけた指摘であると思いましたし、その言葉の中から、人間とは人間になるべきものなんだという課題を見つけ出させていただいたのです。

しかし、このことは、もっと突き詰めて厳密に考えますと、人々が人間であること、人間の

本性を失っているだけではなくて、自己喪失、あるいは自己不在に陥っている、自分が自分になっていない、あるいは自分が自分でありながら自分の本来性を失っているといえると思います。そうしてこの言葉は、人間として生まれながら、人間として最も大切なみずから自身を失い続け、あるいはそのことを確かめることなく生き続けている現代の私たちに対して、その危機的状況を、そういった端的な表現で示し、一人一人がその危機的状況を背負い立たなければならないという人間本来の使命を、課題として私に見事に示している。そういうことを私は、学生時代に思ったのです。

そうしますと人間不在ということは、決して一般の人たちが不在だということではない。自己において不在という事実を確認することが最も必要になってくるわけです。

これはもう十五、六年も前の西洋のある知識人の言葉でございますが、「今や現代という時代は、現代に生きる私たちが、学ぼうと思うならば、あるいは知ろうと思うならば、あらゆることを学び、あらゆることを知ることが可能かもしれません。ただし、唯一つだけのことを除いては」という意味の言葉を見ました。ちょうど小さい子どもさんが、お互いに謎かけをする、そういう感じのする言葉ですね。一切のことは知り得ても、唯一つのことだけは容易に知り得

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

ないということの指摘です。確かに今日という時代は、知ろうと思えばあらゆることを知ることができる時代かもしれません。

これも今から十数年前のことですが、アメリカの宇宙ロケットが月に到達しまして、私たちが子どもの頃様々なイメージをもって空に仰いでいたあの月の世界に、現実に人間が降り立ちまして、随分大きな驚きでございました。私たちにとって月の世界は、大きな夢を抱かせる果てしない大きな距離があったはずです。それが科学という実際の人間の叡智によって、人間自身が月の大地に立つことが事実になったわけですから、これは大きな驚きでした。余談になりますが、四、五年前、たまたま大学のほうからご縁を頂きましてアメリカへまいりました。シカゴに、ここはニューヨークに次いで大きな都会ですが、ミュージアムといって博物館がありまして、ちょうど古代の中国展をやっていました。去年でしたか日本へも来ていたようですが、それをぜひ見たいと思って行ってまいりました。その時、広大な博物館に、たまたまあの月に降り立った宇宙船が展示されていたのです。私は十数年前テレビで、食らいついてといっていいほど熱心に、まさしく人類の大きな歴史の出来事に見入っていたのですが、これがあの時のものかと思うと非常に大きな感動を覚えました。それは決して巨大な船ではないのです。ごく

小さな、二人の宇宙飛行士が中に入れば身動きできないほどの狭さで、しかも内部の目に見える所全部に科学のスイッチが付いている。そういう宇宙船をしげしげと見ながら、一刻大きな感概にふけりました。

そのこと一つを取ってみましても、科学的な叡智は、知恵は、これまで無限の距離であった外の距離を、私たちの知識の範囲にだんだんと縮めてきているのでございます。今日私たちは、茶の間でテレビを見ながら、その日の出来事を、東京や大阪で起こったこと、アメリカやヨーロッパで起こった国外での出来事を直ちに知ることができる状況にあります。しかしその西洋の思想家は、一切のことは知り得るけれども、唯一つのことだけは容易に知り得ないという条件をつけたのです。

その唯一つのこととは一体何なのか。それは、文字どおり一切のものを知ろうとしているこの私自身なのでしょう。

これは確か何年か前に亡くなった方ですが、フランスの哲学者で、今世紀最大といわれる著名な思想家であったサルトル、皆さんもご承知と思います。晩年に京都へ来られまして、京都会館で唯一回、貴重な講演をされたのを、幸い私も聞かせてもらいました。そのサルトルがや

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

はり同じようなことを言っています。それは、「現代の人間の生きようの一つは、その特徴的なあり方は、自己を忘れていることだ。そういう経験を、どんな人も味わっているのではないか」という指摘でございます。自己を忘れているというのは、言葉としてはちょっと妙です。「忘れる」というのに、電車の中とか教室に物を忘れるという場合と、もう一つは一週間前に約束したことをすっかり忘れてしまうといった、記憶を忘れる場合とがあります。ところがサルトルは、忘れるという言葉に自己という言葉を付けて、自己を忘れている、といった。私たちは物を忘れたり、記憶を忘れたりするだけではなく、最も大切な自己を忘れているというわけです。それが事実であれば大変なことです。皆さんも小さい頃、注意を受けた時に、「自分のことは自分が一番よく知っている。一々注意されなくても」と、こういう言葉で、親に対して、あるいは先生に対して反抗した経験があると思います。しかし、もう一つ考えてみれば、どうでしょうか。一番よく知っているはずのみずからが本当に明らかなものであるか。もし明らかでないならば、私たちは、明らかでないかたちのまま、この大切な一生を終わっていいのだろうか。そういう問題があるのではないかと思うのです。

もう一つ、具体的なことを申します。皆さん方は直接ご承知でないと思いますが、東本願寺

に今、同朋会運動というのがございます。その運動の趣旨を確認するために、どの地方でも毎年一回、同朋大会というのを催しています。数年前ですが、私、ある県の同朋大会に出席させていただきました。一日中、午前、午後と話をさせていただいたのですが、午後からはこの地方の方十人が意見発表をされ、その話を受けて私が一時間余り話をさせていただきました。その時の十人の方は、一番若い方が十九歳の看護婦学校の生徒さんで、一番年配の方は七十数歳でございました。その十人の各年代層の方々が一人ずつ壇上に立って意見発表をされたわけですが、これはその中の、五十歳台の後半くらいに見える男性の方の意見なんです。――今日ここで話をすることを勧められまして、私は人前で話したことがないものですから、直ちに断りました。しかし、二度三度と要請され、それでは一体何を話せばいいのですかと聞くと、実はテーマがあって、それは「私にとって最も大切なものは何か」というのだと言われました。そのテーマを聞いて私は、そんな簡単なことなら私にも十分話せる、こう思って私は直ちに引き受けました。そして仕事に紛れて昨夜までこのことについて考えることはなかったのです。ところが夕食後、自分にとって最も大切なものは何かということを考え出したのですが、これが大変でした――。

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

皆さん方は普段、自分にとって一番大切なものは何だとお考えになりますか。その方は、一番大切だと思えるあらゆることを、頭の中で一つ一つ言葉として思い出されたそうです。我々であれば、一番先にお金を考えるかもしれません。あるいは健康、あるいは家庭、あるいは職場と、いろいろな言葉で次から次へと様々なことが浮かんでくると思うのです。その方もそのようにして、一番大切なものを思い出すままに言葉にして、次から次へと確かめてみられたそうでございます。しかし、どの言葉を選んでみても、これとうなずけるものはなかったそうです。そして、あれこれ考えているうちに、とうとう夜が明け始めた。その時に、実ははっとするものを気付かせてもらったとおっしゃっています。自分にとって一番大切なものは、自分自身だった、そういう意見でした。

そして、「この会で話をすることを縁にして、私は、一番大切なみずから自身の人生を、六十年近く最も粗末にしてきたことを知ることができました。実は今日私は、ここに集まった皆さん方に、お礼を申すためだけに来ました。本当に私の最も大切なこと一つを見忘れ続けてきたこの愚かな私に、そのことを気付かせてくださったのは皆さん方でございました。有難うございました。」こういって、壇上で何回も何回も頭を下げておられました。私はその一言が非

常に印象に残っているのです。私たちもそうではないでしょうか。自分のことは自分が一番よく知っている。確かにそういえる面はあると思います。しかし、本当の意味でよく知っているのかと問うた時、私たちの人生を、最も大切なものでありながら一番粗末にしてきたのであれば、その事実をどこかで断ち切って、大切なみずからの命一つを生き切るような人生を発見しなければならないのではないでしょうか。

そういう意味で、人間とは一体何なのかと改めて問うてみた時、私はこういうふうに申したいのです。「人間とは、それは限りなく人間そのものになるべきものです」、と。少し乱暴な言葉かもしれませんが、一人一人が人間そのものになるべきものとして、今日の私という人間が与えられている。そういう意味では人間とは課題的な存在である。私はそのようなことを常日頃考えております。人間から生まれたから人間だというだけではなくて、人間から生まれたものだからこそ、人間そのものになるべきだという大きな使命、大きな責任を、私たち自身が背負っていると考えることはできないでしょうか。

もう一つ、今ふと思い出した例を申しましょう。私の郷里は金沢です。普段ずっと京都におりますけれども、仕事がありまして、よく郷里へ帰ります。ですからしょっ中汽車に乗ってい

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

るわけです。これは私自身が悪いのですが、隣に座った方とほとんど言葉を交わすことがないのです。以前は汽車に乗っている時間が長かったこともあるのでしょうが、目的地に着くまでに親しくなり、場合によっては住所まで教えるような出会いが度々あったのですけれども、今では疲れ果てて乗りますからすぐ眠るか、あるいは雑誌を読むかで、自分のことしかしないものですから、ほとんど話を交わすことがないのです。

ところが今から数年前のことです。私は雑誌を読んでいたのですが、一時間ほどして、疲れたものですから雑誌を伏せて窓の外を眺めていました。その時、隣に座っておられた年配の方が「ちょっとよろしいですか」と言葉をかけられたのです。人間、この一言が大事ですね。一言の挨拶、言葉かけが、なんともいえない人間と人間との出会いとか交流を生み出します。私、はっとするものがありまして「何でしょうか」と問いました。するとその男性が、「ちょっと向こうの網棚をご覧になりませんか」といわれました。列車の、荷物やコートを載せる所です。その頃、危険物の持ち込みについての放送もあったものですから、私はびっくりしてその方向を見ますと、いくつかの紙袋がありました。デパートとか観光地でくれる紙袋です。その中の一つに、袋一面こういう言葉が書かれてあったのです。「生まれた意義と生きる喜びを見つけ

よう。」そしてその方がおっしゃるのです。「どなたの持ち物か知らないけれど、ふとあの言葉が目に入りましてね。さっきからしみじみとあの言葉に照らされて自分をみつめていました。人間として生まれた私が、なぜ人間として生まれたのかということ一つを問うことがなかった。親が勝手に生んだというのでなく、生まれたということの中に無上の尊厳性を見出すことのなかった人生、それは意義のない人生じゃないでしょうか。今日一日生きていることの尊さ、喜びに出会うことのない、そういう人生を歩いている自分が見えてきましてね。いい言葉じゃないですか。あなた、どう思われますか。」私にそのように言葉をかけてくださいました。私も「そのとおりです」といいました。

その方は、ただ、しげしげとその言葉を眺めただけではないのです。誰でも言葉を眺めてはいるのです。その方は眺めた言葉に映った自分を発見しているのでしょう。それが出会いということではないですか。皆さん方は今、学生という大事な時期だと思います。毎日、先生方それぞれの大切な学問に触れていらっしゃるのです。毎日、言葉に触れ、言葉を眺めていることが、皆さんの生活かもしれません。しかし、言葉を眺めているだけでは、そこから人間が生産されることはありません。その言葉に映る自分が受け取り直さなければならないのです。私は、

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

出会うというのはこのことなんだと、見知らぬ人から教えられました。つまり、言葉に出会うということは、言葉を眺めるのではなく、その言葉の語っているような生き方をしていない自分が見えてくることなのです。自分が発見されてくるということがなかったならば、それは本当の意味での言葉との出会いにならない。少なくとも、言葉を通してそこにうごめいている命との出会いにはならないということを思いました。教育ということでいえば、その言葉の底にはたらく限りなき命との出会い、それをもって本当の教育というのではないでしょうか。仏教に「流転」という言葉があります。流転とは、水が流れるということでしょう。流転の人生という言葉がありますが、自分の人生の中に、そういう光や命の尊厳性を見出すことのないような人生を、昔の方々は流転と表現してくださったのではないかと思います。

そのようなことを思ってまいりました時に、ふと思い出したことがあります。ある所で、「人間のしるし」というテーマを、これは人間の本性ということですが、それを与えられたことがございます。大変むずかしいテーマです。今はそのことすべてをご紹介する時間はありませんが、その時最後にこういうことを思い付いたのです。明治の中頃ですが、私の大学の初代の学長の清沢満之先生の言葉に「吾人の世に在るや、必ず一の完全なる立脚地なかるべからず。

もしこれなくして世に処し事をなさんとするは、あたかも浮雲の上に立ちて技芸を演ぜんとするものの如く、その転覆を免かるる能わざること言をまたざるなり」というのがあります。我々がこの世に生きるためには、必ず一つの完全な立脚地がなければならないという叫びです。完全なる立脚地とは、自分が立っていることのできる大地、自分の人生の大地ですが、その大地が明らかにならなければならないとおっしゃっています。そして、もしそのことを明らかにせずに事をなし、世に処していこうとするならば、それはあたかも浮雲の上に立って芸を演じようとするようなもので、転覆を免れぬことはいうまでもないでしょう、と言い切っておられます。これから梅雨が上がると、空に入道雲が出ます。入道雲は随分厚く固いように見えますが、しかしあの雲の上に立つことはできません。自分が生きている大地を明らかにすることのない人生は、転覆を免れない、これが清沢満之先生のお言葉でございます。私は先程、人間とは人間になるべきものだと申しましたが、今、清沢満之先生のお言葉を思いながら「人間とは何か」ということを、硬い言葉でいえば「人間になるべきもの」として、柔かい言葉では「人間にならなければならないという願いの中に生きているもの」として捉えることができるのではないかと思っています。

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

そういう意味で私は、人間とは願いに生きるものだと常々思っているのですが、その「願い」という言葉の中にはいくつかの響きを見出すことができると思います。簡単にご紹介させていただきますと、第一は、私たちは必ず他の者にかける願いを持っている。もちろんその願いは単なる欲望ではないわけですから、現に存在するものを、本来のものとしてあらしめたいというのが願いの本質だと考えてください。そうしますと、私たちが他の者に願いをかけることは、それほどむずかしいことではありません。皆さんは学校でも家庭でも、あるいは寮でも、様々な人間関係や友人関係の中で、様々な願いをかけて生きているのではないでしょうか。

願いということで、これは極端な例で恐縮なのですが、一つ申してみます。こういうことは本当はご紹介することではないのですが、わかりやすいものですから、敢えてご紹介させていただきます。これも列車の中の話です。私はどの列車に乗るか予め決めておかずに、ぎりぎりまで仕事をして、来たのに乗ることが多いものですから、時々座れない時があるわけです。何年か前、京都から郷里へ帰る時のことで、夕方の汽車に飛び乗りました。大阪で既に満員で、京都から乗った者はほとんど座れませんでした。私も仕方なく福井までの一時間四十分、ずっと立ちづめでした。福井へ着く前に車内放送がかかり、お客さんは降りる準備をしますが、

立っている者はどこか席が空かないか、目で探します。たまたま私のすぐ近くの若い男女が降りる準備を始めました。私の前にいる人が座るだろうからこれは駄目だと、なにげなく見ておりました。その日は京都を出る時は朝から小雨が降っていたのですが、汽車が進むにつれて天気はだんだん回復に向かい、福井に着く頃には薄日が射すほどになっていました。恐らく人間の心理としては皆そうだと思いますが、雨に叩かれたあとの靴は汚なくなっていて、この若者も、晴れ上がった町にこのままでは出たくないと思ったのでしょう。その青年は、上着やズボンのポケットに手を突っ込み、何かを探しているようだけれども出てこない。そうこうしているうちにポケットからお金が出て来た。当時はもちろん旧のお札です。青年はその一枚をすうっと抜き取って、そのお札で靴に着いた汚れを拭い始めた。この話は、皆さん、すぐに忘れてください。私が立っていた目の前に、かなり年配のご婦人が座っておられたのですが、その方が、はっきりと私に聞こえるように「まあ」と声を出されたのです。その「まあ」という一声が何を意味するかは、皆さんもうおわかりでしょう。多くの言葉を費す必要はないと思います。私もそのご婦人が何をお感じになったかは、すぐにわかりました。しかし大衆の面前です。そのご婦人はそれきり何もおっしゃいませんでした。隣りに若い女性がいて、これは初めから

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

知り合いだったのか、たまたま汽車に乗り合わせて話し合うようになったのかはわかりませんが、汽車の中ではかなりしゃべっていたのですから、その男性が、きれいな靴で歩きたいと思い、しかも自分でちり紙の持ち合わせがないのなら、その女性に貰ってもいいわけですし、男性のその行為を見た女性が、それを制止して、ちり紙を渡すのが普通ではないかと思うのですが、その女性は素知らぬ顔をしていたのです。私も、その青年に「なんということをするんですか」と言う勇気がなかったのです。そう言えば青年からは、「これはあなたのお金じゃないでしょう。自分のお金で何を拭こうと自由じゃないですか」という言葉が返ってきたかもしれません。私はその時ふと、お金というものの持っているものを思ったのです。今は新しいお札になり、全部近代の人になりましたが、当時は一万円札が聖徳太子で、千円札が伊藤博文だったでしょう。私はその時、なぜお札に様々な人が模様として入っているのだろうかと思ったのです。贋札が作りにくいためだとか、誰かの顔が入っていたほうがいいとかいうのではなくて、私はあの一枚の紙の中に願いを汲み取ることができないだろうかと思うのです。聖徳太子であれば、私たちの文化や政治にとって、あるいは大事な仏教の思想にとってもかけがえのない、いわば、日本の思想の原点をなすほどの大きな意味を持つ方でしょう。そうだとすれば、私は、

この国に住み、生活していくためには、まず私たちの歴史や文化にとって聖徳太子がどのようなお仕事をされ、どのような業績を残された方なのか、あるいはどのような願いを持って生きられた方なのかということくらいは知っていてほしいという願いが、あの一枚のお札の中から読み取れないかと思うのです。伊藤博文にしても、初めて新しい近代政治を切り開いてくださった第一人者とするならば、そこに私たちが本当に心して確かめるべき人が示されているのではないかと思います。そのように了解すれば、その青年が大学の学生ならばお金の願いも聞こえてくるような学問をしてほしい、そういう願いをその青年にかけずにはおけなかったのです。私たちは、他人にかけている願いがあるのです。これが第一点です。

第二点は、自分が自分にかける願いです。その願いを失ったのが、私が学生時代、現代の知識人から聞いた言葉でしょう。人間性喪失、自己不在ということを、敢えて私の言葉でいえば、みずから人間として生まれながら、人間になりたいという大切な願い一つを失ったということなのです。自分が自分にかける願いを失えば人間の崩壊です。現代という時代は、そういうところまで状況が深刻になっているのです。乱暴なことを申して恐縮ですが、そう考えてみることはできないでしょうか。時間がないので一つの例で申します。

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

学生時代、卒業間近で卒業論文も準備しなければならない時でした。その当時私が指導を受けていた恩師に、学校で、「先生にご相談があるのですが、先生のお宅に伺ってもよろしいでしょうか」と尋ねました。先生は心やさしく、「遠いよ。けれども、ぜひ来てください」と、地図を書いてくださいました。私は地図を辿りながら、初めて先生のお宅をお訪ねさせていただきました。夜でございました。大学の先生の研究室で問うてもよいことだったのですが、先生をお宅にお訪ねしたいという気持ちもあったものですから、そのようにお願いしたわけです。お宅へは、目的があってお訪ねしたのですが、今お話ししようと思うのは、その目的のことではないのです。先生は、私がお訪ねした時、既にかなりのご年配でございましたので、大変失礼でしたが私は、「今日初めて寄せていただきましたが、大学から随分遠い道のりでございますね。乗り物を何度か乗り継いでこられるのでしょうが、先生もお齢でございますから、毎朝大学へお出ましくださるのはお疲れでございましょう」、という意味のことを、当時分別のない青年が、大変失礼な言い方で言って、大先生の労をねぎらったのです。ところが先生は、顔に笑いを浮かべながら、直ちに、「そうだろうなあ。お前ら学生からみれば、大変な齢に見えるだろうなあ」とおっしゃったのです。そして、「でもね、私はこの齢になっているが、学校

へ出るのが楽しくてね」と、なんの躊躇もなく、ふっと言われたのです。私はその一言に、はっとするものを感じました。学校で学ぼうとする我々学生にとって、これほど素晴らしい言葉はない、これ以上の大切な言葉はないと、その時思ったのです。もし現在の私に、学生が同じことを問うてくれば、私なら恐らく「もういい加減くたびれていて、いつ辞めようかと思っているんです」とか、「毎日出ていくのは飽き飽きしているんです。どこか静かな所へ行って自由になりたいものです」とか言うのではないかと思います。そのあと先生は、「でもね、帰りがつらくてね」とおっしゃいました。私はその言葉を聞いた時、最初は、やはり学校で一日中仕事をしておれば、疲れて夕方つらいんだろう。それなら初めからそう言えばいいのにと、ふと思ったのです。しかしすぐに、そんな先生ではないことがわかりました。それはこういう意味だったのです。――今日も、この齢になった自分に、学校は出てきなさいという。まだ私のような者に、用があるというのだろう。そうとすれば、今日、この自分を待ち受けてくれる数々の学生さんに、自分に与えられた分を十分に尽くさせていただいたかどうか、しみじみと反省した時、今日も本当に自分の分を尽くしていないことが見えてきて、帰りはつらい――こういうことだったのです。

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

私たちはどうでしょうか。朝、学校へ出てくるのが楽しいですか。帰るのはつらいですか。全く逆でしょう。朝、出てくるのがつらくて、夕方帰るのが楽しいですね。それでは学校が、本当の生きる場所になっていないのではないでしょうか。私はその先生から大切な学問も習いましたけれども、先生であれば本当の先生になりたいという願いを持て、学生であれば本当の学生でありたいという願いを持て、人間として生まれたならば本当の人間になりたいと願う、親であれば本当の親でありたいと願う、そういう世界を学ぶことができました。

第三は、かけられている願いがあるということです。他人にかける願いも忘れている、ましてや自分にかける願いも忘れ続けている、そういう私であろうとも、私という存在がある限り、私を大きな願いの中に生かし続けてくださっている存在がある。その願いの中に生きているのが人間であると明らかにしてくださったのが親鸞聖人の教えである、親鸞の仏教であると日々学んでおります。このことについてもご紹介するつもりでいましたが、時間がなくなってしまいました。朝、家を出る時、「行ってまいります」というと、お宅の方から「行っていらっしゃい」という言葉を受けるでしょう。そこには既に、いいしれぬ大きな願いがかけられているわけです。そのまことの願い、それを親鸞聖人は、阿弥陀の本願といっておられます。

先程学長先生が「三帰依文」をお読みくださいましたが、あの言葉を聞きながら私は、ふと一つの詩を思い出しました。その詩をご紹介して終わりにさせていただきたいと思います。この詩は、皆さんもあるいはお聞きになったかもしれませんが、現在愛知県にお住まいになっている宇野正一先生がおつくりになったものです。

「生きる望みがありません
ごめんなさい、お母さん」と
二人の少女が
鉄道自殺をした
それは
彼女たちが十七歳のこんにちまで
「人身受けがたし」の一言を
ただ一言を
誰からも聞かなかった不運であった

『真實心』第七集昭和60年度1986年3月発行（京都光華女子大学）

こういう詩なんです。十七歳ですから高等学校の上級生でしょう。女子生徒が二人で、大変残念な悲しいことですけれども鉄道自殺をしたということです。そのことを宇野先生は、新聞の報道でお知りになったのか、あるいはご近所の方であったのかわかりませんが、その事がらをこういうふうに追求されたのです。しかも、ただ死んだのではありません。「生きる望みがありません。お母さん、ごめんなさい」と、今日のみずからの命を直接与えてくださったお母さんに謝ることを十分に知りながら、なお、死を選んだ。なぜ自分の死を選ばなければならなかったかと問うた時、宇野先生は、人の命として生まれ難いその人生に、今現在生きている十七歳の今日まで、「人身受け難し」というあの三帰依文の言葉に出会うことができなかった、それが若い命をみずから断たなければならなかった一番深い理由であった、とおっしゃっているのです。恐らく家庭の問題、友人関係、学校の問題、試験の問題など、具体的な問題があったのでしょうが、そういうことではないのです。一番根本的な根の問題は、人として生まれ難い命を、人間として賜ったその尊い命の中に、最も大切な自己の尊厳性一つをも見出すことができず、またそのことを、誰からも語り伝えられることがなかったそのことが、実は不運だったのだということを、宇野先生はこの詩の中で語ってくださっています。

かけられている願いというのは、私はみずからが生きている命そのものの中から、「どうぞまことの人間になってください、どうぞまことの人生を全うしてください」という声を、自分の命の底から聞き当てていくことだと思います。そのことを聞き当てることのできるのは人間だけではないでしょうか。そう考えますと、人生とは、人間として生きるということは、そういう命の願いをみずからの今日一日の中に、どのように成就させていくのか、それが人間にとって最も大きな課題なのだと、そういうことを私は常日頃思っていることでございます。

随分厳しいことを申し上げましたが、お許しいただきたいと思います。長時間ご静聴くださいまして有難うございました。

――一九八五・六・二七――